

9などで指摘がある)、このツイッターにおいても「本件棋戦のことをブログに記載したので見てほしい旨述べている(乙イ6号証の7頁)。

これら原告の言動に対し、インターネット上で非難が勃発し、スレッドが立てられるなど大きな反響となったことを受けて、原告は、自分の考えをさらに補充する趣旨で、翌4月15日の早朝午前5:45分までに、自身のブログにおいて「(見ていて)つまらなかった」は率直な感想なんですけど、なんかおかしいですか?あの将棋(の後半)見て「(内容が)おもしろい」という人の方が少数派なんじゃないかと思いますが。」などと述べ(「コメントのコメント」甲5号証の2)、このブログを記載した旨をツイッターでも掲載した(4月15日午前5:45、乙イ6号証の8頁)。

このように、原告は、インタビューで述べた原告の意図、さらに、原告の発言に対する批判に反論する趣旨も含め、短時間のうちに二度にわたり、ブログに原告の認識や意見を掲載したのであった。

エ 原告の言動に対する世間一般の認識

これら原告の言動に対する反響は大きく、2ちゃんねるなどで複数のスレッドが立てられ意見交換がなされた。

その一例をあげると、原告が1回目のブログを掲載した後の4月15日午前1:04、2ちゃんねるで

伊藤「つまらなかった。まともな将棋がやりたかった」という標題のスレッドが立てられている(乙イ7号証)。

このスレッドは、わずか24時間後(4月16日午前1:08、乙イ7号証89頁)には、1000件の意見を超越終了するに至っている(なお、2ちゃんねるの意見は1000件までしか掲載できない仕組みである。)

その中で、原告の会見やブログなどを踏まえた原告の言動は、原告が主張するとおりに自己を卑下しているだけだと擁護する意見もあったが、他方

で、プロ棋士に対する礼節を欠く非礼な態度であるとする非難も多数含まれていた。

原告の言動は、対戦相手に対する礼儀や非礼を欠いているという意見として、例をあげると、次のようなものがあった。

「10：プロに対するリスペクトが感じられんな」

「83：同じことを言うにも言い方ってもんがある」

「145：この人は他人がプライドやメンツというやっかいな物を背負って生きていることを知らなそう。悪気は無さそうだから自分自身の中にもそういうものが無いのかもしれない。」

「599：プロ棋士への敬意を持っていない」

「610：対局後はありがとうございました。まともな将棋がしたかったで締めくくる奴があるか」

「660：伊藤が今年で50歳のいい歳したサラリーマンのくせに社会的地位のある人間に対する礼儀も気配りもTPOもわきまえられないガキだから批判されてるだけなんだよな・・・(略)・50歳の社会人なら自分の言動が周りにどう影響するかぐらい判断して、そこは大人の対応するだろ普通。ブログにしたってtwitterにしたって不特定多数の人間が見ることを知ってるにもかかわらず2ちゃん用語でおどけみたり。20代までならいざしらず、50のおっさんがこれじゃ目も当てられない。」

「676：次から対局ルールに「礼節」も明文化して、「対局相手に敬意を払う」としなければいけないかな。」

「782：いい年した大人なら塚田の涙をみてああいう発言はできないという話で。今思うと塚田だって悔しさこらえて点数を数えていたんじゃないのか。プログラムは読めても、人の心が読めない」

いとほ。」

「787：どう考えても敬意のカケラも無い。本音で語ってカッケーって思うのは高校生まで。伊藤は精神年齢が幼いんだよ」

「790：いい大人がお互いを敬わず、小馬鹿にしてることがおかしいの。ましてや相手は歴史のある業界でプロまでのし上がった人物なんだから、趣味と言い張っても、将棋に関わる人間ならとして（原文ママ）敬意を払うのが普通。ボナンザが使ってる棋譜に塚田氏の棋譜も入ってておかしくないんだぜ？」

「805：いくら強くてもこいつらは『敬意』を知らん。ノミと同類」

「813：対局終了後に塚田が「ありがとうございました」って言ってんだからそれに返すのが礼儀だろう。棋士をリスペクトしろとかいう以前の問題だ。最低限のマナーすらなってない。戦った後で自分が「ありがとうございました」って頭下げたら相手が礼も何もなしに「け、つまんねえ試合だった」とか言ったらどう思う？っていうぐらいの話。」

「821：むしろニコ生とは言え、将棋の対局なんだから最低限のマナーを守らせる方がずっと重要だと思うけどね。頭古いのかもしれないけど。」

「831：わかるわ、人間として社会人としていい大人のオッサンがやっていい限度を超えてる。演技とか演出とかだからさwwwみたいに言う奴らも同レベルで屑だと思ってるわ。しかもこうやってグチグチ終わった後にブログで書いて、ほんとにむかつくわ」

「916：こいつからは将棋と棋士に対するリスペクトが感じられない」

「966：これを”つまらない”って言うのは、塚田プロのみならずボナンザを作った保木さんに対する冒涇だ。こういう人には二度

と関って欲しくないね、将棋が汚れちゃうわ。」

「992：伊藤は対局直後に塚田の目の前で「つまらない将棋」と吐き捨てたんだからな。自分が指したわけでもないのに。」

オ 以上のように、原告の言動に対し、これは「対戦相手に対する礼儀を欠いている」と評価する者が多数存在していた。

そして、これらは、被告内舘が本件記事を掲載するより「前」に表明されたものであって、被告内舘の論評による影響を何ら受けていない率直な一般の人々の感想であった。

(4) 被告内舘の論評に違法性はないこと

ア 被告内舘の論評の姿勢と人物像

被告内舘牧子は、作家、脚本家として数々の傑作を生み出し多方面にわたって文筆活動を中心に活躍している教養豊かな、すぐれた見識を持った人物として人口に膾炙しているところである。加えて、日本の伝統文化に造詣が深く、将棋や相撲をこよなく愛し、これらの文化を通して日本人の礼節・礼儀作法を重んじることの大切さを強く感じている人物であり、この姿勢を評価され、平成12年から約10年にわたり、女性唯一となる財団法人日本相撲協会の横綱審議委員会委員としても活躍し、元横綱朝青龍の不行跡に対し厳しくこれを論評したことでも広く世間に知られている。

それゆえ、被告内舘の意見に対する世間の賛同や評価は高く、これまで長期にわたり、さまざまな事象に対し、辛口のコメントをしてきたが、これまで一度もその批評が名誉棄損に該当すると当事者から法的に糾弾されたことはなかった。まして、訴訟提起までされたのは、金輪際本件が初めてであり、後述する本訴訟前の原告との交渉経緯などもあって、被告内舘は原告から本件訴訟提起されたことについて、率直に言って非常に困惑しているところである。

イ 本件記事が対象とするテーマ